

京都の景観保護

星野陸

(2020 年度入学 鈴木ゼミ 4 期生)

京都に初めて来た人がまず驚くのは、やはりその景観の美しさではないだろうか。実際に私も 2 年前初めて京都に来た時にゴミ一つ落ちていない整備された道と、歩くだけで歴史を感じる町並みに非常に驚いたのをよく覚えている。他府県でもそのような場所はあるが、それは一部の通りの話に過ぎない。京都では、市全体からその上を行くまさに「奥ゆかしさ」や「上品さ」を感じることができる。そこにはおそらく市の政策やボランティアなどの要因があるのだろうが、なぜ京都市民はそこまで景観保護に取り組むのか。これを考える上で、今回私が明らかにしたいのは、1「京都市が行っている景観保護の政策」と、2「京都市民が景観保護に積極的な理由」である。歴史ある京都に住み、それを守っていく存在でもある人間の一人として、京都の景観保護について考えていきたい。

まず1についてだが、京都市では、平成16年に日本初の景観に関する法律である景観法が施行されている。そして翌年の平成17年には、景観づくりに関する総合的な計画として京都市景観計画が京都市によって策定されている。その後何度も一部変更を繰り返し今の計画になっているのだが、この中で京都市は多くの地区に制度や条例を出している。このことから、景観保護の秘訣はこの制度や条例にあることが読み取れる。その中でも私が注目したのが、建物の高さと広告物の規制である。この二つは、府外の人に説明するときが一番理解してもらいやすく、街の景観を保護する上でなくてはならない存在だと考えたからだ。建物の高さ制限は府外から来た私も知っていたほど有名である。人口が多い都会でありながら高層ビルがない景色からは、京都の自然と街の融合を見て感じるができる。現在実際に施行されている高さの規制は31mであり、これはビル10階に相当する。よって京都にはタワーマンションも高層ビルもない。これだけでも十分考えられた規制と言えるが、それだけではない。三方の山並みや、その周辺の歴史的建造物の景観を損ねることのないように、山あいに行くにつれて建物を低くしているのだ。数か所だけではなく、全ての歴史的建造物を大切にする姿勢からは、街全体が「京都ブランド」であることを強く感じる。次に広告物についての規制だ。広告といえば、街中にある程度自由に設置することができるものという認識があったが、京都ではそうではない。高さや面積など、全国展開しているチェーン店でも厳しい規制があるのだ。有名な例として、コンビニが瓦屋根になっており、店舗自体の色も茶色を基調としたものになっていることがある。しかも地域の町並みに応じて規制の厳しさを変えている。こうすることで、147万人が住む都市としての経済も回すことができるのだ。このように、多くの規制があることで

京都の景観が守られている。しかし、規制だけで市全体がここまで統一感を持って景観保護に取り組むことができるだろうか。建物の高さや広告の規制に関しても、経済は大事であるが、あくまで主として目立つべきなのは歴史的建造物や町並みであるということを市民も理解している。私は、京都の優れた景観を守っているのは、規制よりも先に市民の意識であると思う。

これが2の「京都市民が景観保護に積極的な理由」に繋がるのではないだろうか。京都では、千年以上都が置かれていたこともあり、風習や家柄、建造物や道に至るまで今でも続く伝統的なものが多い。そのため、それを守っていこうとする人々も多い。いい意味で、プライドが高いともいえる。それを示すように、京都市の景観保護に関するホームページには、「日本が世界に誇るべき至宝の京都」や、「永く守られるべきもの」という表記が目立っていた。市民の意識が低い場所ではいくら役所が呼びかけようと守らない人が多く出てしまうが、京都ではその数が圧倒的に少ないと感じている。例えばひとつ県を跨いだ大阪ではそこら中にポイ捨てがされている光景をよく見るが、京都ではゴミが落ちていて汚いと思うことはほとんどない。ボランティアによるゴミ拾い活動もあるのだろうが、それを考慮しても京都の道の綺麗さは全国でも群を抜いている。このように歴史ある京都を守ろうとする人々の意識や目標が、普段の行動に影響を与えて集団の結束を生み出し、規制や制限を生んだのではないだろうか。

今回の一つの結論として、京都の美しい景観とそれを守る規制や制度は、市民全体の意識の賜物であることが言える。土地のアイデンティティや独自性を確立し、それを守っていこうとする京都の意識は全国でも屈指であり、そのような市民性ができあがった理由は歴史的背景が大きい。このようなことを含め私は、京都という場所は京都市民だけでなく日本全体で守っていくべきものだと考える。これは100年後も京都が美しく趣ある姿でいるために非常に重要なことではないだろうか。京都に住む人間として、残りの大学生活を通してさらに深く京都のことを知りたいと感じた。



参考

<https://www.city.kyoto.lg.jp/tokei/page/0000281258.html>
[guideline_kouhan.pdf \(kyoto.lg.jp\)](#)